年間約6000万円コスト削減

プリントネット 水なし印刷の実施効果

小田原洋一社長が講演

10月12日と13日の両日、広島で開催された。印刷産業夢メッセで、印刷ネット通販の人気サイトを運営するプリントネット㈱（鹿児島市荒田1の31の27）の小田原洋一社長が、「水なし印刷による生産性向上」と題する講演を行った。昨年7月から実施した水なし印刷によって年間およそ6000万円のコスト削減を達成したことを披瀝。ヤレ紙削減費、エッチ液等の薬品費、ローラーの巻替費等の使用中止や大幅な削減はもちろんのこと「水なし印刷に移行したことで印刷機を増設する必要がなくなったため、年間5000万円ほどの原価償却費や人件費も発生せずに済んだ」と既存機の両面8色機1台での高稼働、高生産、無事故を強調した。

小田原社長

セミナーは、午後4時から水なし印刷の採用会社事例というテーマで実施。鹿児島市に本社を置く、プリントネットの小田原社長が、同社東京西工場（山梨県上野原市）で昨年の7月から稼動する水なし印刷専用機であるリスロンSP両面8色機の生産性向上について説明。年間6000万円のコスト削減に成功した内容を具体的に解説した。

冒頭、小田原社長は、9月の決算で30億円の売上高を達成するとともに純利益率が7%になったことを明かした。平成17年に印刷通販事業をスタートさせてわずか7年で30億円の大台に乗った。昭和43年の創業以来続けてきた地場産業型印刷業に見切りをつけ、平成17年にネット事業に全面転換し、利益の出る仕組みをつくったと説明。現在サイトには印刷物のアプリケーションを容易に検索できるシチュエーション検索をはじめデザイン発注サイト、電子ブックなど顧客対応のアプリを拡充させ、新規、リピーターともに件数を増やしている。また、印刷ネット通販の専業サイトとして日本WPAが取り組む国際的な環境保護活動に参加していることも表明した。

元来、印刷業は仕事量（受注量）が増えれば、それに応じて印刷機の台数を増やすのが常套手段だった。ところが、プリントネットは、この7年間で菊全判印刷が4台（24胴）しか揃えていない。従業員数150人で売上高30億円の印刷業がたった24胴しか持っていない。一般の印刷業でもネット通販の印刷業でも印刷機不足と思うが小田原社長は、たった24胴でも最大スピードで印刷し、24時間稼動させることで利益を出すことに成功したと語る。

「1胴あたりの年間生産額が1億2千万円」と前置きし、この生産額を達成させたのが同社の標準印刷であると解説。「ジャパンカラーの認証を受けてデルタ値の範囲内に収めること。カンプに色合わせをしないこと。他社の色見本を受けないことを前提にして、印刷機1台あたり時間2から7台を生産できる体制を構築した。特に水なし印刷は、見当と色見を同時に開始して立ち上げるためロット3000枚なら60分で2台生産できる。水ありの両面8色機では、時間あたりせいぜい1台しか生産できなかった。少なくとも時間あたり1・5台以上生産するためには水なしする必要があった」と説明した。

さらに水なし実施後の利点として、一発見当と色合わせをほぼゴーストの予防、印刷スタートの短縮、ヤレの削減、機長の教育が容易にできる、刷版現像液とエッチ液が不要、水棒が不要、ローラーの磨耗が少ない、加乳化現象ゼロなどを説明し、最後にコスト削減効果について説明した。

「資材費の面で、エッチ液、水棒の巻き替え等の使用中止で月々50万円のコスト削減になる。しかし、水なし印刷に移行することによって、増設しなくともよくなったこと。これが最大のコスト削減効果になった。つまり、水ありのまま両面8色機を稼動させていたなら、1時間に1台しか生産できないから、単純にもう1台、両面8色機を導入しなければ、仕事が消化できなかった。水なしの両面8色機で時間あたり2台印刷できるようになったから増設しないで済んだ。もし、もう1台水ありで両面8色機を増設していたなら、年間の原価償却費が2500万円、人件費6人分で2500万円、つまり年間5000万円の固定費が発生し、さらにヤレ等の損紙が年間で735万円、エッチ液が52万円、ローラーの巻き替えで20万円は出費していた。なお、損紙とエッチ液、ローラーの巻き替えの額は、水なし実施後の両面8色機の削減費でもある」と締めくくった。

また、1胴あたり1億2000万円の生産額を上げた要因のひとつとして、2カ月に1回の予防メンテナンスを実施していることと毎月ジャパンカラー2011に準拠したチャートを印刷して品質管理を励行することによって年間を通じて機械上のトラブルが皆無だったことも強調した。仕事量に応じて印刷機台数を増やすという、これまでの慣例を覆したプリントネットは、ギャンギングされた多面付けの水なし版を両面8色機の最大機械回転数毎時1万2000回転で稼動させて、時間あたり平均2台を常時生産している。

今回の講演は既存機1台の機械パフォーマンスを最大限に引き出し、しかも阻害要因を排除して収益を上げる、収益を改善する印刷業のビジネスモデルの提示であった。